

平成 25 年度「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」議事録

1. 開催日時 平成 26 年 3 月 7 日（金） 14：00～16：00
2. 開催場所 エルガーラホール 会議室Ⅱ
3. 出席者
山下委員長，小野副委員長，横山委員，古賀委員，原口委員，山浦委員，守田委員
放課後子ども育成課青少年育成コーディネーター5名，事務局
4. 議題
 - (1) 委員長・副委員長の決定
 - (2) 傍聴要領について
 - (3) 放課後等の遊び場づくり事業「わいわい広場」の運営状況について
 - 統計（平成 26 年 1 月末現在）
 - 青少年育成コーディネーターからの報告
 - (4) 人材育成について
 - ① プレイワーカー育成事業
 - 学生プレイワーカー育成講座
 - プレイワーカー（遊びのサポーター）養成講座
 - ② わいわい先生（現場責任者）研修
 - ③ 補助員研修
 - ④ プレイワーカー研修
 - (5) 保護者アンケートについて
5. 事務局からの報告事項
6. 議事概要
別紙のとおり
7. 会議資料
 - （資料 1）「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」設置要項
 - （資料 2）「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」名簿
 - （資料 3）「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」傍聴要領
 - （資料 4）わいわい広場開設状況について
 - （資料 5）わいわい広場について（青少年育成コーディネーターからの報告）
 - （資料 6）人材育成について
 - （資料 7）「放課後等の遊び場づくり事業（通称：わいわい広場）」に関するアンケート

平成 25 年度「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」議事概要

1. 開会

○課長

・冒頭挨拶

2. 委員紹介

3. 議事

(1) 委員長・副委員長の選任について（事務局より設置要綱により説明）

○委員

- ・ 学生時代から子どもに携わりながら研究を続けてきており、「新・放課後等の遊び場づくりモデル事業検討・提案会議」でも委員を務めた山下委員を委員長として推薦したい。
- ・ 承認。

○委員長

- ・ 設置要綱に基づき、副委員長に小野委員を推薦。承認。

(2) 傍聴要領について（事務局より資料により説明）

○委員長

- ・ 傍聴要領について確認。委員より承認。

(3) 放課後等の遊び場づくり事業「わいわい広場」の運営状況について

- 統計（平成 26 年 1 月末現在）（事務局より資料により説明）
- 青少年育成コーディネーターからの報告（事務局より資料により説明）

○青少年育成コーディネーター

- ・ 参加者数は各校区によって多少の人数差があるが、子どもは楽しく過ごしている。見守りサポーター登録者数の減少はわいわい広場の運営にあたり大きな課題の一つ。保護者からの申し出がない場合に現場は苦慮している。
- ・ 企画事業は年 2～3 回行われているが、現場責任者が工夫し、全校に呼びかけながら実施してきた。中には PTA 会長が企画事業を率先して企画していただけたところもある。子どもの楽しい遊び場の経験になればと思っている。
- ・ 運営協議会では、新規開設した小学校長から、わいわい広場を開設して良かったと感謝の言葉をいただいている。PTA 会長からも良かったとの言葉をいただいている。不登校気味の児童もわいわい広場があるときは、楽しみにして学校に来るといった声も聞かれる。
- ・ プレイワーカーの力も大切。プレイワーカーにより参加人数も増える等、わいわい広場の魅力が増している。
- ・ わいわい先生の中には、研修を受けて遊具を工夫したり、場づくりを工夫したりといっ

た成果を出しているわいわい先生もいる。着任したばかりのわいわい先生は、試行錯誤しながら現場に携わっている。補助員の中には高齢の方もおられる。

- ・子どもにとって楽しい遊び場になるよう工夫しているわいわい先生もいれば、安全管理だけに気を付けて指導するわいわい先生もいる。またわいわい広場に理解をしてくれる校長もいれば、うまく連携ができない学校もある。コミュニケーションを継続してとっていくことが大切だと考える。
- ・期待も含めてわいわい広場に高い評価を得られている地域があるものの、わいわい広場の認知度等必ずしも高いとは言えないところもある。
- ・参加者数がやや減少傾向にある学校もあるため、子どもへの刺激が必要である。大人が子どもを思い出しながら刺激していくといったことも必要なのかもしれないと思う。ただ、わいわい広場で仲良くなった子どもが、わいわい広場ではなく家や近所で遊ぶことも見られるようになってきた。
- ・思い悩んでいたわいわい先生がいたが、最近は元気を取り戻している。実地研修等で多くを学ぶこともあったのではないだろうか。それは、わいわい広場をより魅力的にする手がかりのきっかけをつかめたことで、自信がついてきたのではないだろうか。

○委員長

- ・わいわい広場の現状については、おおむね良好で、定着してきていると理解できた。不登校気味の児童にとってもわいわい広場は居場所の一つであり、違う形で学校に来るきっかけになっていると思った。
- ・見守りサポーターの不足や、高齢の補助員の方の見守りについては不安な面もあるかもしれない。ケガがないように安全管理をすることも大切だが、安全面に気が入りすぎることは、魅力的なわいわい広場につながらないので注意が必要。わいわい先生の中には、こういった悩みを抱える中で、実地研修では学ぶことが多かったようだ。

○委員

- ・わいわい広場は、わいわい先生が要。少人数で集まり話し合った実地研修では、日々悩むことや、工夫することについて全員でフィードバックしながら話し合うことができた。
- ・ただわいわい先生の力量ではどうにもならないこともある。例えば、地域から来ていただく補助員との連携が難しいことや、わいわい広場についての理解が乏しいこと、子どもとの関わりについて疑問を持つこともあるように見受けられる。今までの補助員研修では、補助員に重要性等が届いていないのかもしれない。来月実施される予定の補助員研修では、そのあたりについて十分留意していただきたい。プレイワーカー研修でも、意識の共有をしっかりと行っていただきたい。
- ・わいわい広場の理解は、様々な立場の人に対してスピーディーに行われることが大切。研修には、年間スケジュールを計画的に組んでいただきたい。
- ・わいわい先生の中には、もっとほかの現場に出ていきたい、知って理解していきたいと思っているわいわい先生がたくさんいる。また、ベテランのわいわい先生と若いわいわい先生の差も出てきている中、スキルアップする研修を組んでほしいとの声も聞かれる。

○委員長

- ・わいわい先生と補助員の相性も関係しているのかもしれない。人を責めるよりも、仕組みを変えていくことも大切なのでは。年間を見通した人材育成スケジュールを組み、全

体としての仕組みを整えてほしい。

○委員

・実施校によって違うと思うが、参加する児童の学年別の構成はどのような状況か。

○事務局

・登録率では、1～3年の低学年層で8～9割を占めている。

○委員

・7～8割が1～2年。6年生は1人位登録しているが、登録だけでほとんど参加していない学校もある。低学年がとにかく遊んでいる。

○委員

・冬は16:30までなので、高学年は授業が終わったらほとんど遊べない状況。そのため、わいわい広場に登録していないけれど、ほんの少しだけ遊んだり話したりして帰る児童もいるようだ。

○委員

・その後、塾があったりスポーツ教室があったりと児童は忙しい日々を過ごしている。

○委員長

・わいわい広場が開設されたことで、留守家庭子ども会の登録が減少することもあるのでは。

○委員

・留守家庭子ども会を休んで、わいわい広場に参加する児童もいる。ちょっとしか遊べないけれど高学年が参加する学校もある。企画事業を実施するときは、高学年の児童も参加している。

○事務局

・新規開設校では、留守家庭子ども会の登録が少し減少しているところも見られる。わいわい広場にも居場所としての評価があるのではないか。低学年から高学年になった児童の中には、時々わいわい先生に話しに来たり、少し遊んで帰ったりする児童もいるようだ。

○委員

・そういう状況が広がっていくといいが。幼少期やギャングエイジの時期には、遊びは大切なこと。塾に行く子どもも増えている中、わいわい広場が広がっていくといいのだが。

○委員

・参加登録をやめる児童の調査を行ったことはあるのか。塾や習い事で参加登録をやめるケースもあるように思うが。

○事務局

・やめる方の調査や評価はしたことがない。

○委員

・参加カードに保護者から押印してもらうのが幼稚でめんどくさいと思っている児童や、一旦帰ってから学校に来ると自由に遊べるので参加登録しない児童もいるようだ。また、近くにいい公園があり、そこでゆったりと外で遊ぶことが培われたケースもある。ここ数年で、公園で遊ぶ児童を見かけることが増えたという声もある。

○委員

- ・昔の頃から考えると、参加印が必要なことが考えられない。わいわい広場から公園へ広がるという事例はいいことなのでは。わいわい広場で遊ぶ必要がなくなる児童もいるのかもしれない。

○委員

- ・わいわい広場がきっかけで、公園のように外で遊ぶといったことが広まっていけばいいわいわい広場で遊ぶこともできるので、選択肢が増えていっている。

○委員長

- ・運營業務受託者（事業者）についてはどうか。

○事務局

- ・4事業者は3年以上もしくは3年近く運営していきながら経験を積んでいっており、それほど大きな差は見られない。

○青少年育成コーディネーター

- ・事業者によって差が見られることもある。遊具の要望を出しても、届くのが早い事業者と遅い事業者がある。また巡回や相談の頻度についても、多い事業者と少ない事業者がある。ただ昨年度に比べて今年度は少しずつ遊具が充実してきている実感がある。
- ・研修を実施する中で、わいわい先生の意識は高い。講師によるけん玉やコマ、手作りの遊具といった紹介があったことで、わいわい先生が現場に戻り実践している。

○事務局

- ・今年度はわいわい先生の研修を密に実施したことで、スキルは平均的に高まった様子が伺える。ただ事業者の担当者がついてこられない現状も見られるので、事業者の担当者向けの研修の必要性も感じており、事業者側のスキルアップについては来年度以降の課題と認識している。

○委員長

- ・青少年育成コーディネーターの支援があり、研修があることで、わいわい先生のスキルアップがある様子が分かった。地域型との違いについてはどうか。

○委員

- ・しばられずに自由にできることが違う。みんなで相談しながら子どもに関わっており、予算内でやりくりしている。
- ・事業者では研修があっているのも、その点ではさみしいこともある。ただ区内では交流会もあるので、いろいろと相談できている。

○委員

- ・地域型では後継者を育てているが、今の人数で十分運営できている。市の研修を受け、活発な意見を受け、いろいろなやり方を学んで今頑張っているところ。自分たちが動かないと何も変わらないところが、地域型のいいところと思っている。

○委員長

- ・地域型は中心人物がいてこそ運営されている。

○委員

- ・心配しているのは事業者の関わり方。運営について事業者任せにすることはある程度は仕方ないことだが、事業者の理解が今一つのようにも思えるので、事業者についての検証や評価が必要と考える。

○委員

- ・この頃は、事業者研修が進み、現場運営はうまくなってきたり、逆に地域型が厳しいところもあると思っている。

○委員

- ・事業者だけでは、わいわい広場等について理解が十分に伝わらないままであるように見える。フォローするように、研修をうまく組み込みながら育て、伝えていくことがわいわい先生のモチベーション向上にもつながる。事業者の中には、新しい部署をつくって取り組むというところもあるようだ。
- ・また、わいわい先生同士も育てあうことが大切。研修を踏まえてお互い交流していきながら、前向きに向かっている姿勢が見られる。

○委員長

- ・主役は子ども。事業者が前に出過ぎないように、サポートがしっかりできるかがポイントであり心配だった。現場では交流が深まることで支え合いができつつあるようだ。わいわい先生の今後についてのビジョンは気になっている。また、以前に比べて地域型が減っていくのはさみしいことだと思う。

○委員

- ・見守りサポーターの減少の原因は何だろうか。

○副委員長

- ・現場によって違いはあるものの、保護者に仕事がある等関わられる時間がなくて忙しいことがある。ただ登録が少ない中でも、熱心に携わってくれる見守りサポーターもいる。

○委員

- ・見守りサポーターになる条件はどうだろうか。

○副委員長

- ・参加登録児童の保護者に呼びかけを行っている。見守りサポーターに意見を聞くと、好評である。自分の子どもの友達が分かたり、他の保護者と知り合いになれて良かったりと楽しそうにされている様子がある。こういった評価は、わいわいだよりを通じてPRしていく必要がある。見守りサポーター登録については、学校に来て子どもと遊んでみませんかというように呼びかけ方も大切だ。
- ・遊びを通して子どもと保護者、地域の方にも挨拶が広がったり、気安く元気よく声掛けが行われるようになっていった校区もある。

○委員

- ・わいわい広場の意味を理解して広がっていき、気持ちよく参加してほしいと思っている。

○副委員長

- ・補助員の中には高齢の方がおられ、昔の遊びをされる等積極的に活動される方もおられる。じっと座るだけの方もおられる。

○委員長

- ・安全を前面に出すと補助員が責任を感じる部分もある。地域へのアプローチの仕方、理解や普及啓発について、当推進委員会も動いていくことが大切なのではないか。今回は、子どもよりも関わる大人の話がメインだった。子どもの遊びに関しては大丈夫そうで安心した。

(4) 人材育成について

(事務局より資料により説明)

○委員長

- ・携わっている委員からも補足説明をお願いしたい。

○委員

- ・学生プレイワーカー育成講座では、8大学から43名の大学生が登録・参加している。毎月行われている月例会では、どうして子どもに関わるのか、遊び場のリスクマネジメント、子どもに関わって見える今と未来、子どもとの関係・子どもへのまなざし、幅広い視野を持って次のステップへ等を学生が主体となって学んできた。現場実習を経験してからは、現場に関わってきた中での課題や悩みを共有し、取り組み方をみんなで考えたりした。また学生企画のプレイパークを実施し、巨大オセロや段ダンボールを使ったりする遊びを実践したほか、子どもだけでなく保護者とも関わりを深めるなどの経験を積んできた。
- ・プレイワーカー養成講座では、5日間実施し、56名が修了した。参加者の中には元保育士の方や、学生、子どもに関わっている市民の方もおられた。昔の自分を思い出すワークショップに始まり、遊び心を取り戻すこと、工夫から生まれる遊び、発達障がいについて心理学の視点から学ぶ等、主体的な参加が明日のエネルギーになること、人を育むことが場を育み、場が人を育むといったことを体験することができたと考えている。

○委員長

- ・わいわい先生の研修、プレイワーカーの研修、補助員の研修のほか、育成講座等、人材育成の紹介があった。この件についてどうか。

○副委員長

- ・学生のプレイワーカーが来ると、子どもの表情がいきいきとしている。学生プレイワーカー育成講座を受けて、子どもとの関わりをしっかりと学んでいることがわかる。学生のプレイワーカーの感想として、現場で活動してきた後、現場での振り返りがなかなかできないことが残念だということがあった。わいわい先生も片付け等で忙しいところではあるが、すこしでもゆっくり話すことができるきっかけがあってほしいと考える。

○委員長

- ・今年度の研修は充実していたが、わいわい先生の負担があったのではないか。年間スケジュール等が必要なのではないか。プレイワーカー、補助員、事業者の研修のバランスも大切だ。また、現場同士の交流がもっと活発になればいいと思っている。

○委員

- ・学校現場での若い先生の学ばせ方はとてもうまい。ただ子どもと遊ぶことはとても大切だが、この点は昔と少し違っているようだ。以前から話しているが、子どもと遊ぶことについて、大学の講座や単位取得の認定の一つとして捉えることはできないのだろうか。子どもを前にすると、どうしたらいいのかわからなくなることもあるようだ。教員養成の一つとして必要なのではないかと考える。

○委員

- ・毎回すごい取り組みをしていると感心する。若者にとって青年教育とはどういうことか考えさせられる。講座の組み立て方がうまい。これはもっと多くの人にも知ってほしい。

○委員長

- ・やってきたことのまとめも必要だ。学生が主体でまとめたものはある。一年間研修してきたことを振り返ることも大切で、わいわい先生研修の振り返りも大切なことではないか。

○委員

- ・子どもが高校生と触れ合った後は、あんなお兄ちゃん、あんなお姉ちゃんになりたいと思う様子が伺える。これもそうなのではないか。わいわい広場で遊んできた子どもが大きくなって高学年になったとき、次のプレイワーカーになるのかもしれない。楽しさを教えてくれる子どもも増えてくるのでは。

○委員長

- ・大学の単位認定の件、研修のまとめ等についても検討していく必要があると考える。

(5) 保護者アンケートについて

(事務局より資料により説明)

○委員長

- ・分析はこれからかと思うが、効果が出てきているところもある。報告書は改めて届くかと思うので、また改めて検証等を行っていききたい。

5. 事務局からの報告事項

○事務局

- ・わいわい先生による暴力事件がおこったので報告する。経緯。学校名はふせるが、平成25年10月にわいわい広場の帰りの会の時間に発生した。わいわい先生が、遊具の片付けや集合についての話をしていた時に、一部の児童が話を聞かなかったために逆上し、たまたまいた無関係の児童を蹴った。そのときにわいわい先生が興奮して暴言を吐いたと当該児童は言っている。当日、当該児童の保護者からわいわい先生に確認の電話があり、その後関係者から事情を聴取し、事実関係を確認、再発防止策を作成し実施した。同年12月には保護者に報告を行い、了解を得た。
- ・事件後、当面の対応としてわいわい先生は任から外し、他校のわいわい先生が従事することでわいわい広場の運営を継続した。その後、3学期からは新しいわいわい先生が着任している。
- ・事件が発生した後、全事業者を緊急招集し、再発防止策の徹底を指示した。またわいわい先生も緊急招集して臨時研修を行い、暴力は一切許されないことの確認を行った。また実地研修でも子どもとの関わり方についてより深めていくことを学んだ。事業者においても、研修を実施した。
- ・当校においては、わいわい広場関係者全体に対して開催前には事前ミーティングを行うよう指示した。また学校側への定期的な報告を行い、連携を深めていくことを確認している。
- ・今後も、学校との連携を図りながら当校の運営状況を継続して確認していく。今回の背景には集合の呼びかけを行っても、参加児童たちがなかなか集まらなかったことがあるようだ。その中でも当該児童は、日頃から模範的に片付けたりしており、頼りにしてい

たといわい先生の報告もあっている。ただ暴力への認識が浅く、参加児童の安全に対する配慮が欠如していることは許されない。今後二度とこのようなことがないように、再発防止策を徹底していく。

- ・この件については、子どもではなく関わっている大人がトラブルを起こしている。当該児童の保護者からは、わいわい広場は大変いい事業だ。そのためにもしっかりとやってほしいとおっしゃっていただいている。この言葉のとおり、二度と起こさないようにしていく。

○委員

- ・子どもの育ちを知っていく必要がある。集団でいると興奮しやすい特徴を理解し、ブレーキをかけることを学ぶ必要がある。

○委員

- ・臨時研修を受け、携わっている校長への報告と相談を行った。

○委員

- ・ほかの児童が見ていたのでは。どのような話だったのか。

○事務局

- ・ほかの子どもからは、暴言もひどいということがあげられていた。当該児童の保護者は、よりよいわいわい広場に、今回のことが無駄にならないようにしてもらいたい、また情報が独り歩きしていくのは良くないと思うので、公表等はしたくないとの意向があったので、他の保護者には伝えていない。
- ・当該わいわい先生の任を外した後、交代で従事した他校のわいわい先生がよく頑張ってくれた。

○委員

- ・子どもは変わってきている。世代間のギャップもあり、見守る側の大人の物差しだけではわからない。高齢の補助員には寛容な方もいるが、こういった違いについての対処が難しい側面もあるのかもしれない。本来地域から補助員がでることとなっているが、この条件を広げていくことも視野に入れることはできないのか。例えば、補助員は原則地域から活動していただくが、他校のわいわい先生もスタッフとして関わられるようにするといったことも必要なことではないだろうか。

○委員長

- ・わいわい先生が事務日に孤立している現状もあるのかもしれない。補助員として他校の現場に研修しに行くといった連携体制はできないのか。

○委員

- ・補助員が充実している学校では、隣の学校が困っている時に補助員の助っ人として携わったこともある。

○委員

- ・近隣校での助け合いがどんどん増えてきていることはある。

○委員

- ・子どもに関わっているので、現場での苦労はよくわかるが、手を出すことは許されない。学校の子どもはすべて我が子のように接すべき。子どもの良くない情報だけではなく、良い情報もどんどん学校に入れてほしい。良い情報があれば、わいわい広場であろうと

なんだろうと学校としてその子を認めるチャンスが増えることになる。どの子も我が子のように接するし、どの現場でも耳を傾けるし、きちんと指導もする。

- ・一つの事例なのかもしれないが、学校としてもわいわい広場との関係をしっかりと共有していきたい。わいわい広場だからといって、学校と切り離したりはしない。

○副委員長

- ・このように理解をいただける方が増えていくとありがたい。まずは、わいわい先生一人に対応しないこと。必ずたくさん関係者に関わってもらうことが大切。担任にも話をすることが大切。多くの関係者が心を開くことで、参加人数も変わっていくと考える。学校日よりわいわい広場のことを話してくれたり、学校のホームページで紹介してくれることで、参加人数が増えることもある。

○委員

- ・子どもの特性を理解して対処することが大切。遊びなので、あまりにじっとする必要はない。言葉の暴力も許されない。日本は誉めない文化と言われる。日本では欠点を指導してきかせようとする。良いところを認めて状況を改善していくことが大切なのではないか。

○副委員長

- ・わいわい先生研修の中では、わいわい広場に携わっている中で子どものいじめについても心配する声が上がっている。子どもに関わる中での課題だと思う。

○委員長

- ・課題があるからこそ、もっと多くの意見が出されていくことが大切なことだと考える。事務局に伝えたいことは、当推進委員会の開催頻度を高めてほしい。定期的集まることで、こういった話を深めていくことができると考えている。
- ・時間が来たため、平成 25 年度「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」は閉会としたい。